

事業名	狭山市学校支援ボランティアセンター
事業の特徴	市民ボランティアスタッフの運営による学校支援の総合的なコーディネート

実施機関名	狭山市教育委員会生涯学習部社会教育課（狭山シニア・コミュニティ・カレッジ同窓会）
連絡先	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1-23-5 TEL 04-2953-1111 内線5673 FAX 04-2954-8671 URL <a href="http://www.city.sayama.saitama.jp/kakuka/kyoiku/shakyo/hp/index.htm">http://www.city.sayama.saitama.jp/kakuka/kyoiku/shakyo/hp/index.htm</a>
事業規模	市区町村
事業主体	教育委員会
事業のテーマ分野	学校支援

## 1 事業の概要

狭山市学校支援ボランティアセンター（略称SSVC。以下、「SSVC」という。）は、学校支援を総合的にコーディネートするために狭山市教育委員会で設置した機関である。運営は教育委員会から「狭山シニア・コミュニティ・カレッジ同窓会」へ委託し、ボランティアスタッフで運営している。

SSVCでは市内各小中学校27校にコーディネーターを配置し、学校からの要請にこたえ、SSVCの人材バンクから支援者を調整・確保し、学校へ派遣している。主な支援は学習支援である。

SSVCの具体的な業務内容は、①学校支援業務に関する情報の集約と発信、②学校支援ボランティアバンクの設置と運営、③学校からの支援要請に基づくボランティアの調整と派遣、④学校支援ボランティアやコーディネーターの育成などの業務、⑤学校支援ボランティアセンターの運営についての関係機関との連絡調整などである。

## 2 事業の趣旨、目的

狭山市では高齢者の生きがいがづくりの理念から「狭山シニア・コミュニティ・カレッジ（略称SSCC。以下、「SSCC」という。）」という事業を平成12年度から実施している。SSC

Cの大きな特徴は市民団体（現在はNPOの認証を取得）に企画・運営を委託し、シニアによるシニアのための学びの場を創出していること、及び仲間との出会いとそこで得た知識や今までの経験を活かして、修了後も引き続き地域社会の一員としての活躍（貢献）を目的としていることである。

平成14年度には、SSCC修了生により同窓会が自主的に組織された。同窓会では、サークルのみならず、地域貢献を目的とした活動支援部会が設置された。その中の一つが「学校支援グループ」として地域に密着した学校支援活動をスタートさせた。活動当初は、学校や校長会に向いて支援趣旨の説明をしたり、アンケート調査等を実施したり、対話の中からつかみ取ったニーズに応えるための行動を起こし、手探りの状態から少しずつ無理なく時間をかけて学校支援を実践していった。

学校支援活動は、めまぐるしく変化する時代の要請に応えるとともに、地域の教育力を高め、学力向上のみならず、児童・生徒が学校支援グループとの触れ合いの中から、人格形成期に大切な心の糧を得るなど、次代を担う子どもたちの健やかな成長を願うための活動である。

教育委員会ではこの活動を評価し、平成19年度より「狭山市学校支援ボランティアセンター」運營業務をSSCC同窓会に委託した。これを機に、同窓会は会員内のみならず、広く市民にもボランティアの参加を募りながら活動を展開するようになり、学校と学校支援ボランティアの中間支援を担っている。以前より学校支援を行ってきた団体や個人も多く存在することから、それらの方々とも相互に認め合いながら支援を継続していけるように、自分たちで各方面の方々に依頼して諮問機関を設置し、意見を伺いながら活動を発展させている。

### 3 事業の内容

#### (1) 学習の内容

SSVCはSSCCをきっかけに生みだされた組織といえる。ここではSSCCでの学習について述べることにする。

前述のとおり、SSCCは、市が学科の編成から受講生の募集・選定、授業補助、行事の企画運営までをNPO法人「狭山市の高齢社会を考える会」へ委託し、シニアによるシニアのための学びの場を提供しているもので、年間延べ約2,000人がボランティアとして関わる、市民との協働事業である。対象はおおむね55歳以上の市内在住又は在勤者である。これまでに開講されてきた学科は、ハンゲル、中国語、英会話といった語学関連学科やパソコン、狭山の歴史、いきがい、ジャーナル、レクリエーション、楽農、子育て支援、高齢者ピアカウンセリング、マジックなど、市民ニーズに合わせて多種多様である。毎年300人、多い年で400人以上もの方々が、毎週1回、年間で約30～36回（1つの学科を）学んでいる。4月の入学式から始まり、学科の学習のほかにも、クラス対抗の体育祭や、学習成果の発表や他学科の内



SSCC授業風景

容を知る機会ともなる文化祭、受講生が執筆するカレッジニュースの発行などがあり、3月末の修了式で締めくくっている。こうした行事は、受講生同士のコミュニケーションを活性化させている。行事は、単なるシニア・カレッジではなく、シニア・コミュニティ・カレッジを形作るものとして重要な位置を占めており、その後の地域貢献活動に結びつく要因の一つと考えられる。修了生は、平成12年の開校以来、延べ約3,000人を数える。

学校支援ボランティアセンター運營業務はSSCC同窓会へ委託しているため、SSCCの修了の時期が近くなると、同窓会の案内とあわせて、学校支援ボランティアの登録や学校支援ボランティアセンター事務局の仕事への勧誘を行えるシステムとなっている。

## (2) 学習成果を活用したボランティア活動等の内容及び推進の方法

平成19年4月、中学校の一室を事務所としてSSVCを開設した。開かれた学校づくりを進め、地域の教育力を活かした学校への支援を進めることで、地域とともに子どもたちの「生きる力」を育むことを目的としている。

SSVCでは、市内各小中学校にコーディネーターを配置している。これらのコーディネーターは学校からの支援要請を受け、支援要請の内容に合った支援者を人材バンクから選出し、学校に派遣している。

人材バンクには現在約300名の登録がある。支援者の募集についてはSSCCの修了時に受講生に対し「学校支援ボランティアアンケート」にて人材バンクへの登録希望をとるほか、市広報で広く市民に対しても登録を呼びかけている。

学校から寄せられる支援依頼内容は、主に教科学習の補助や総合的な学習の時間のゲストティーチャーなどの学習支援である。例えば算数・国語の丸付けや理科の実験補助、家庭科のミシン補助やパソコン授業の補助などである。その他、花壇の手入れなどの環境整備支援なども行っている。

学校支援を行っていくうえではコーディネーターの役割が重要であることから、コーディネーターへの支援として、年3回、コーディネーター会議を開催し、情報交換を行うとともに、4つのブロックごとに会議や交流会を実施している。また、「学校支援ボランティアセンター短信」を毎月発行し、コーディネーター等に配信して活動内容等の情報の共有化を図っている。

その他、適宜研修会を実施しコーディネーターや支援者のスキルアップを図っている。



学校支援活動の様子

## (3) 推進体制等の仕組み

運営委員会を月1回定例開催する。運営委員はSSVCで選任し、教育委員会所管課と同窓会の同意を得る。委員会には教育委員会所管課、同窓会役員も出席する。委員会は、SSVCの決議機関であり、各学校の要請事項の確認、研修会の開催や支援者人材バンクの管理、広報等、各領域別の課題の検討を行う。

また運営委員会とは別に「諮問会議」を置き、広く識者の意見、助言、提言を受け運営の参考

としている。年に1～2回開催し、メンバーは教育委員会、大学教員、小・中学校教員、PTA、おやじの会等に依頼している。

SSVCにはセンター長、事務局長、専任事務員を置いている。専任事務員は学校の長期休業中を除く毎週月・火・金曜日13時～16時の間、主に受付窓口として対応している。その他にも運営委員、会計、会計監査を置いている。これらのスタッフが情報集約、人材バンク、広報の3つのグループに分かれて業務を分担しSSVCの事業を展開している。



SSVC運営委員会

#### 4 成果と今後の取組

成果としては、SSCCによって地域社会に志を同じくする同士を見つけることができ、自発的な意志に基づいて学校支援活動が開始されたことである。規模が大きくなり、市の事業として委託することにより、行政は施設や運営経費を中心に活動を支援し、SSCC同窓会が中心となって広く市民に呼びかけ、協力者を組織して主体的に活動が展開されている。学校支援ボランティアを活用することにより、地域の特性や資源を活かし特色のある学校づくりにもつながっていく。

子どもたちは異世代の人と接して、視野が広くなり豊かな人間性・社会性の形成が図られていると考えられ、地域の支援者は子どもたちを支援しながら自らも一緒に学んでおり、子どもたちから必要とされることによって、生きがいを見出している。

シニアの自発的な学校支援活動は、シニアの生きがいにも、学校教育の充実にも、地域ぐるみでの子どもの成長への取組にもつながっており、まさに地域住民としての生涯学習活動ともいえる。

課題としては、コーディネーターはボランティアと学校とを取り持つ重要な役割であることから、信頼感や豊かな人間性をもって、両者の思いやねらいを受け止め、効果的に支援をしていけるような人材の発掘と育成が挙げられる。また、学校側の担当教員が忙しくコミュニケーションがなかなかとれないことや、学校の方針の違いにより、支援活動の学校間格差が出ている状況がある。

今後も広く地域住民の参画を推進するとともに、既存の学校支援ボランティアとの連携を図ることにより、学校支援内容の更なる充実を図ることが必要である。

【執筆者の職・氏名】 狭山市教育委員会 生涯学習部社会教育課 主幹 神山 孝之